

日本の歴史 46

『戦国武将の実力：111 人の通信簿』

小和田哲男著（中央公論新社 中公新書 2015）

本書の請求記号 281.04 Ⅱ0wa

稲垣宏行

日本史において人気と知名度が高く、今年も注目が集まる戦国武将。戦国史研究の第一人者である著者は、戦国武将111人を選出し、統率力・教養・実行力・企画力・先見性の項目を5段階評価で採点しています。

乱世である以上、勝者以上に敗者となった武将も多く存在します。敗者に転落してしまうと、優れた資質や功績までもが度外視され、大きく減点されてしまいがちです。しかし著者は、客観的な視点でそういった武将たちの「功」の部分も取りあげています。例えば、先々年の大河ドラマ『黒田官兵衛』に登場した荒木村重も織田信長に重用されながら裏切った挙句、劣勢に陥るや味方の兵ばかりか一族も見殺しにして、独り毛利の領国へ逃げた武将とされています。しかし著者は、村重が劣勢の最中に毛利へ向かったのは、援軍要請のためだと見ています。また、村重が自分の領国に構えていた堀や土塁の類である「惣構え」は、織田軍の攻撃を一年近く凌ぐほどの防御力を有していたといいます。教養も高く、後年の村重は道薫の名で豊臣秀吉の茶会に招かれたほどでした。

今川義元も教養人としてはともかく、武将としては軟弱なイメージがつきまといまいます。二万五千にも及ぶ大軍を率いながら、二千の織田軍に桶狭間で敗れてしまったのが大きな理由です。しかし彼は、強豪で知られる武田信玄と上杉謙信の戦いを、内に入って仲裁したことがあり、このことから著者は彼が信玄や謙信に引けを取らない武将だったのではないかと述べています。義元が商業政策に関しても信長に劣らず重視しており、

商人を積極起用して彼らから税収を得ることで「富国強兵」を図る柔軟で積極的な政策を採っていたことも、本書が彼を並みならぬ武将と評価する理由の一つです。

足利將軍義輝と戦国大名の三好長慶の二君に仕えながら、義輝を暗殺し長慶からは主君の座を奪い取った松永久秀。下剋上が常態化した乱世でも後ろ暗いイメージが強い武将ですが、実は、信長とは彼が京都へ向かう以前から仲が良かったと言われています。最終的には敵対し壮絶な自害を遂げますが、その直前に信長は、彼に対して降伏を勧める使者を送ったと言います。それは信長も評価するほど武将として優れていたからだったそうです。

巻末の「武将能力採点表」にもある通り、能力順位は最初のページの北条早雲が一番で、最後のページの松平信康が最下位です。織田信長や現在注目されている真田幸村などの有名な武将は当然、高い順位にあります。しかし、本書において特筆すべきことは、敗者に落ちた武将の「功」の部分も明らかにしたことだと思います。歴史は勝者が作る物だと言われることがありますが、我々はそれに惑わされて、敗者となった人々の「功」の部分を見落とし、実際より低い評価をつけてしまうことが往々にしてありがちです。本書を一読すると、それを自覚させられます。本書に登場しない武将たちにも、もし接する機会がありましたら、是非皆さんの視点で正しく評価してあげてください。

いながき ひろゆき（司書・情報サービス課）